

評価研究会

「主体的に学習に取り組む態度」の実践と評価方法の工夫

グループ代表 村瀬 歩

(1) 研究内容

新しい学習指導要領に移行し観点別評価が導入された。我々の現場で「主体的に学習に取り組む態度」の授業実践とその評価を議論してきたが、前の学習指導要領の「関心・意欲・態度」の実践と評価方法とほとんど同じで、納得できる結論に至らなかった。

上記のような出来事を危惧する教員が有志で集まった。そして現場レベルで改善したく本研究会を発足した。この研究会では「主体的に学習に取り組む態度」の実践と評価方法を研究行う中で、日々の授業改善・実践報告を行っていく。

(2) 研究方法

①文献輪読（月1回 Zoom にて）

②日本数学教育学会の発表

本研究では、月に一度の書籍輪読会を実施した。この輪読会の前半部分では、TOSS の出版物を中心に取り上げ、後半部分では TOSS に限定せず、参加メンバーと共同で書籍を選定し輪読を行った。TOSS の出版物を選択した主な理由は、その読みやすさに基づいていた。さらに、代表がこの輪読会およびそれに基づく実践の成果を、2023 年 8 月に開催された日本数学教育学会で発表した。

(3) 成果物

①日本数学教育学会の発表スライドと②大会発表要旨を載せる。

①日本数学教育学会の発表スライド

「主体的に学習に取り組む態度」の 評価の実践

都立工芸高等学校・定時制 村瀬 歩

背景	目的	方法	結果	考察	結論	展望
----	----	----	----	----	----	----

新しい学習指導要領に移行し観点別評価が導入された。我々の現場では「主体的に学習に取り組む態度」の実践と評価方法について議論がなされた。しかし、結果は前の指導要領の「関心・意欲・態度」とほぼ同じであり、納得できる結論に至らなかった。

背景	目的	方法	結果	考察	結論	展望
----	----	----	----	----	----	----

自らの学習を調整しながら、学ぼうとしているかどうかという意思的な側面を評価する

小目標
学習スキル

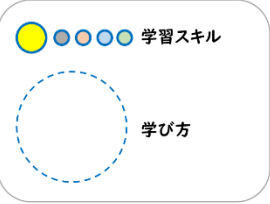
主体的
達成感

学び方

背景	目的	方法	結果	考察	結論	展望
----	----	----	----	----	----	----



学習スキル



学び方

②大会発表要旨

「主体的に学習に取り組む態度」の評価の実践

都立工芸高等学校・定時制 村瀬 歩

1 研究のねらい（はじめに）

学習指導要領の改訂に伴い、昨年度から高等学校でも「観点別評価」が導入された。とりわけ「主体的に学習に取り組む態度」は、評価方法などが現場で議論になった。

定時制高等学校の実態を踏まえると、技能習得することで「できた！」と思わせることが「主体性」につながることを、これまで指導してきた感想である。

高校生で求められる技能習得を達成するためには、小目標が必要であり、それらの積み重ねで、大目標が達成できる。本稿では小目標を「学習技能」と定義し、「章や項の目標を達成するために必要な技能」と意味づける。

これらの小目標を重ねることで、学習意欲を引き出していく。

2 研究の方法

（1）学習技能の作成

「学習技能」は筆者自身のオリジナルで作成した。作成の手順は、①教科書の各ページにある「ねらい」を列挙する、②①を「生徒が苦手とするところ」、「得意な生徒と苦手な生徒の差が生まれるところ」に分けた。なお、どちらも該当しない「ねらい」も存在する。③②を達成するためには、どのような技能が必要かを精査したものを「学習技能」とした。

（2）学習技能の習得

学習技能を習得するために、毎時間、音読とプリントの記述に取り組ませた。

ア 音読

音読は毎時間の授業の初めに行った。独自プリントを用意し、決められたところを読ませた。読み方は一斉読みと一人読みである。はじめは主に一斉読みであるが、慣れてきたころには一人も読みを増やしていった。

イ プリントの記述

音読の後に、3分ほどでできる簡単な穴埋め

プリントを解かせた。特に計算分野は、応用が利くように答えよりも「途中式」を重視した。

ウ パフォーマンステスト

生徒には、音読とプリントの記述を、実際に教師の目の前に取り組ませた。いくつかある問題から教師が問題を指定し、生徒にその問題だけを記述させ、音読させた。このテストを「パフォーマンステスト」と称し、月に1回ぐらいのペースで行った。

（3）学習技能の評価

独自にループリックを作り、評価基準を設けた。音読は一度も詰まらずに読むこと、プリントの記述は1つのミスをしないことを評価Aとした。

3 研究の結果

授業に対して真面目に取り組む生徒なので、音読の声が大きく、記述も取り組んだ。パフォーマンステストは、毎回ほとんどの生徒がほぼ満点であった。少数ではあるが試験前に勉強する者もいた。

以下、昨年度の私のクラスの定期試験の平均点である。学期期末：82.7（68.7）2学期期末：87.5（77.4）、学年末：90.2（75.9）。（ ）は一昨年度の私のクラスの平均点である。両年とも数学はあまり得意ではないクラスであるが、若干昨年度の方が試験勉強を真面目に取り組んでいた。

4 研究の考察

数学が苦手なクラスであるが、パフォーマンステストは満点を取る者がほとんどであった。おそらく、短くでもよいので毎時間、繰り返し取り組んだためと考える。

定期試験に点数の向上は、学習技能の習得によるものとは断言できない。しかし、内容が進むごとに、生徒なりに自分で勉強を進めることができるようになった。

他のメンバーの活動記録（輪読の感想、一部抜粋）

伊藤 貴之氏

数値目標を設けることは難しい、と感じるが、それを乗り越えることを決意された吉永先生の行動がすばらしい。 中学校ではどのようにすることができるか。 課題 1. 小学校からの学力差が大きい 2. 授業は、各教科担任に任されている 3. 教科によつての必達目標を図る客観的な基準設定が難しい（1人だけの教科もある） 出来そうなこと(案) 毎年、年度初めに同じテストを行い、前年度までの達成度を確認する。 評価方法 個人内評価 A：中学1年のテスト「 0.2×3 」でつまづいていた B：中学2年のテスト「 $+0.2 \times (+3)$ 」(中1の復習)の計算問題を入れる。 A→Bが出来ているかどうかで、小学校時の少数の乗法が克服できたかがわかる。（+と+の乗法は、苦手な生徒もほぼできてここでつまづくことは考えにくい）

「必達目標で学力保障のシステムをつくろう」感想 1 4 3 ページまでの内容項目 1 必達目標（1）教師の責任 指導の結果には責任を持つ（2）数値目標 数値を示したことでごまかしがきかなくなる。（3）絶対評価 履修形式から習得形式への転換 2 経営の視点から見た学校の問題点 その1 意識改革ができない世界 理由1. 相手が子ども 理由2. 競争がない（公立学校） 理由3. 本物の教育実践にふれる機会が少ない その2 学習システムのない世界 目の前の子どもをなんとかしたいという教師の思いだけでは、問題は解決しない。 その3 研修システム（上達論）のない世界 原因1. 他の職業では、その腕を伝える方法がある。教師の世界にはそれが無いに等しいから。 原因2. 戦後の長い間、教育を理念で語り、子どもの事実を問題にしてこなかった。 その4 評価システムのない世界 企業の場合は、評価に数値目標を用いる。数値目標は、保護者への学校の公約であり、品質保証なのである。 3 経営をシステム化する（1）これからの学校のあり方をシステム化する（2）研修システム ①「自主・個人練習」形式の研修 ②「部分練習」形式の研修 ③「練習試合」形式の研修 ④「対外試合」形式の研修（3）評価システム 第1 目標に対する到達度を数値化した 第2 通知表を渡す時期を考慮した 第3 教師の授業への意識改革（4）学習システム ①学習環境の整備 ②T O S Sの学習システムの導入 ③授業中心の流れをつくる日課の工夫 2 感想 数値目標を設けることは難しい、と感じるが、それを乗り越えることを決意された吉永先生の行動がすばらしい。 中学校ではどのようにすることができるか。 課題 1. 小学校からの学力差が大きい 2. 授業は、各教科担任に任されている 3. 教科によつての必達目標を図る客観的な基準設定が難しい（1人だけの教科もある） 出来そうなこと(案) 毎年、年度初めに同じテストを行い、前年度までの達成度を確認する。 評価方法 個人内評価 A：中学1年のテスト「 0.2×3 」でつまづいていた B：中学2年のテスト「 $+0.2 \times (+3)$ 」(中1の復習)の計算問題を入れる。 A→Bが出来ているかどうかで、小学校時の少数の乗法が克服できたかがわかる。（+と+の乗法は、苦手な生徒もほぼできてここでつまづくことは考えにくい）

明治図書 向山先生の「到達度評価に耐えられる学力をつけることこそ21世紀の教師の仕事である」との言葉が心に残った。評価の話になると、何をどのように評価するかばかりに関心が行ってしまうが、評価の本質はこの向山先生の言葉に全て現れていると思う。結局は私たちが子供たちに学力をつけてあげられる指導力がついてくれば評価の問題も解決するのである。しかしこれは自分自身が出来ていないだけに言いにくい。またそれを言い訳にして何も言わない状態とな

ってしまっているのが反省である。 P40-45 「知識・技能の評価」について述べられているが、「知っている・できる」と「わかる」の違いを理解しておくことが大事であると感じた。「わかる」というのは理解を伴った豊かな習得（有意味学習）をし、記憶に定着しかつ応用のきく知識にする、ということと認識した。 また「知っている・できる」のテスト問題を作るのは簡単であるが、「わかる」かどうかのテスト問題を作るのは工夫が必要である。その工夫の具体例が示されていた。「思考・判断・表現の評価」についての話が載っていた。ここで「わかる」レベルの思考力とは異なり、文脈に応じて複数の知識・技能を総合する「使える」レベルの思考力まで意識することが大切であると感じた。数学での「使える」レベルを測る具体例も載っていた。参考になる事例である。

（匿名希望）

学習技能は、より具体的な技能に細分化して示すことで、具体的な身につけさせたい学習技能として授業に落とし込めると考える。この考え方は部活動にも応用できそうだと感じた。私は、バスケットボールの指導も行っている。部活動でも、学習技能（習得すべき技能）の一覧表のようなものを作ってみたいと思った。また、主体的学習に取り組む態度を測定するためのループリック作成にも役立ちそうである。

学校は学習・研修・評価システムのない世界である、まさにその通りである。この本は、そのシステムの構築のポイントを評価・研修・学習の項目ごとに記している。評価システムの単元通知表には度肝を抜かれた。早いフィードバックの重要性をわかっていながら、単元通知表には至っていなかった。通知表という形にはできなくても単元ごとの評価を示したい。また、研修のシステムも実に具体的で興味深い。まずは自分の授業の撮影と文字起こし必ず夏休み明けに行いたい。学習システムには日課の工夫の所が特に印象的であった。システムから変えていく取り組みを通して、学校改革に努めたい。

評価と評定の区別がはっきりした。評定とは、ごく一部だけを切り取ってされるという言葉が評定に対する謙虚な向き合い方を感じた。向山先生の評定をつけるつらさについて知れたのが新鮮であった。つい先日、前々任教校(そのときは練馬区)でお世話になった、先輩教員とのみかわす場面があり、教師は評価がなければいかに天職かと言っていたのが思い出される。それだけ教師にとってもつらいものである。少しでも励みになる形で通知表を渡せるかがポイントだと思う。

総括的评价と形成的評価の違いを理解し、形成的評価の視点で、授業の振り返りをさせたいと考えた。また、村瀬先生の実行されている「今日の授業をまとめなさい」という時間を持たせるようにしたいと思った。そのときの視点、丸写し、雑に書くこと、レイアウト、数学的・見方考え方に触れているかといった基準を知れたのは大きかった。ループリックを予め、示すことの大切さを学んだ。

レディネステストについて、私はあまりしっかりできていなかったのですが、先日研究授業があり、指導案の生徒観を記入する上でレディネステストの結果を載せたほうがよいと教科指導委員から言われ実行しました（AIドリルの活用）。その結果、授業にここが不足している生徒がいるということを前提に行えたのが収穫でした。このことから、各単元の学習前にレディネステストを実施していきたいと考えました。また、出口の情意は「教科の中身に即して形成される態度や

行動の変容」から、問題作りができることと言い換えていただいたのが腑に落ちました。振り返りに関しては、現状はあまりできていないのですが、今後検討していきたいです。

主体的に学習に取り組む態度の評価例で批評しながら読むことはあまり経験がなかったので、とても学びになった。パフォーマンス評価やポートフォリオ評価がどういう背景から作られたのかがわかったのが学びであった。ただ、この評価のしかたが教科にとって一概に適切とはいえないと考えた。自らの理解の状況を振り返ることができるような発問の工夫で、メタ認知させられるかが変わってくると思った。その上で、余弦定理の覚え方を考えさせる活動は勉強になった。あとは、レベルは上がるが、例えば余弦定理を使った問題をつくれという発問も良いのではないかと考えた。

前崎 崇氏

『子供を替える通知表』の 98 ページ、一向山の仮説が学級通信として、保護者に提示されているのがとても有効だと感じた。また同時それを提示する気概も必要であると感じた。「あゆみ」の保護者の返信から、保護者も知らないような内容を書かれていて、一人一人丁寧に具体的にみられていることがわかる。自分自身、もっともっと子供のことを見なければならぬし、具体的な記述でメモを取らなければならぬと感じた。『必達目標〜』156、157 ページの一覧が秀逸。あそこまで具体的に根拠だって目標一覧を作成し、その目標を立てるのみではなく、その目標を達成できたのか、達成できないなら何が原因だったのかを校長として、職員に提示し、実行させ、指摘していることに驚いた。また「単元通知表」なるものが存在し、確かに有効だと思うが、そこまでしっかりやり切っていることが驚きである。自分自身もすべてではないが、少しずつ提示できるものを提示していこうと思う。本日もありがとうございました。

『学習評価』を読んで。P68 数学の評価 「[重点化のポイント] 判断にあたっては、記号の書き忘れ等の表現不十分をある程度許容し、証明のすじ道が正しいとわかることを重視するようにしたい。」参考にし、採点していきたい。「総括に用いる評価（記録に残す評価）」ワークシートの A、B 評価基準の判定が難しいと感じた。P18 ヤマ場に向けて子供の追求信をじわじわ高め、・・・「ヤマ場」を意識して授業を作り、展開させていきたい。本日はありがとうございました。このような機会があり、学習できます。

向山先生のテストの受けさせ方の話は、私の概念を崩してくれました。中学なのである程度入試を見据えて受けさせることも必要ですが、テストを受けることによって、次のやる気がなくなる子とやる気が出てくる子がいることを理解した上で取り組ませようと思いました。『学習指導』では私にとってはかなり難しい内容でした。「学校の学習は、豊かな授業と貧弱な評価が印象的でした。村瀬先生がところどころで発問をしてくださることにより理解が深まったと思います。ありがとうございました。

『子供を変える通知表』ノート教科書チェックの手法が紹介されていてとても参考になりました。「158 ページの 11、左記の上で、どうしてもできない時は見て見ぬふりをする場合もある。」長谷川先生から「完璧を求めない」と言われたことがあります。そこに通じるものがあり、とことんまで追い詰めてはいけないことも教育の場面ではある。というのはとても納得でき実感している内容です。「テストに点数をつけるべき」それは私も感覚的にはそう思いますが、

向山先生もそのように思われていて、よかったです。『学習評価』個別評価と個別評定、一瞬その違いが明確にならず、応えられませんでした。村瀬先生のおっしゃることに納得です。

『学習評価(図書文化)』33ページ、「自分で間違いや分からなさに気づくことを促す」すぐに答えを言ってしまうがちなので、その視点を持ちたい。「つまづき」の3点。「やり方」「意味」「学び方」様々なつまづきがあることを把握したうえで指導に当たりたい。40ページ「客観テストも問い方次第で「わかる」レベルを評価する。」確かにそうだが、作問能力、作問にもっともっと時間をかけなければならない。43ページ「使えるレベルの課題」43ページの表に書いてあることはもっともだが、実際に授業をしていくとなると、かなりハードルが高くなることを感じた。